

セツ の つゆん

NO.75



トップダウンの教育制度改革が矢継ぎ早にすすめられている。

地方教育行政法の改正では、「新教育長」を首長が任命するとともに、基本方針を定める「教育大綱」も、首長が策定することとなった。学校教育法及び国立大学法人法の改正でも、教授会の権限を限定して、学長のトップダウンのガバナンス設計に組み替えている。

「トップダウンの改革」とは、二つの意味でだ。大きな議論もなくトップダウンで決定されたこと。教育の方針が首長や学長というトップだけにゆだねられたことである。憲法の理念にあった教育の「自由」と学問の「自由」、大学の自治は、投げ捨てられてしまった。

教育・学問という営みは、多様な関係者が自由闊達に意見を出し合い、熟議を重ねながら協同の参加の力で紡ぎあげていくべきものである。これが民主主義というものである。法律は通過してしまっただが、私たちは民主主義を守り、教育を政治の道具にしてはなるまい。

高橋 満 (センター運営委員)

ひと言 トップダウンの改革

目次

ひと言	高橋 満	1
教師の私が教師になるために		
秋を待つ教師に	森 達	2
手で考える	真山 栄子	3
教師としての宝物	佐々木大介	4
たくさんのエールを胸に刻んで	内海 泉	5
ミカン	佐藤 正夫	6
私を育ててくれた子どもたち	矢部智江子	7
わたしの出会った先生 7		
平野さんに誘われて15年	東田 晃	9
3・11 3年すぎた今、私は		
予想もしていなかった人生を歩んでいる	菊田 絹子	10
	阿部美弥子	11
生かされた命が私を動かした		
教室の報告		
子どもの声に耳を傾けながら・・・	大崎 聡	14
新高校入試を考えるために		
高校入試110番から見えてきたこと	村上 智志	15
	四倉 俊夫	16
新高校入試制度について思うこと		
報告 教育講演会「グローバル化」と英語		
小学校での英語教育 ～現場の課題～		18
教育時評		
教委制度の改悪にどう対応するのか	中森 孜郎	20
表紙写真について		21
日本臨床教育学会 第4回研究大会案内		22
本の紹介		24
センターの動き		24

教師の私が 教師になるために

大学時代の恩師が「教師は教師であることから直ちに教師になるのではなく、教師になろうと努めることによって、はじめて教師になることができる」と語ったことがある。人それぞれに自分を育ててくれたと思える出会いや出来事があることだろう。どのような出会いや出来事が、教師として生きることへと向かわせたのか。6人の方をお願いをして書いていただいた。

秋を待つ教師に



森 達

「誰もがすばらしい輝きを持っている」「みんなで力を合わせてすばらしい学級をつくっていこう」という思いとは裏腹に、「素直ではない」生徒たちの言動に戸惑う私がいた。初めて学級担任をして受け持った中学2年生。なんとかして「指導」をしなければならぬという焦りが次第に募り、肩に力が入っていった。

第4回明日の授業のための教育講座（1982年7月28日、30日・宮教組主催）で聴いた、坂本光男さんの言葉が忘れられない。

『今年はいくつなにも挑戦してみたい』という思いで、誰もが新年度を迎える。だが、夏休みが終わり2学期も半ばにさしかかる頃、『春を待つ教師』になっていないだろうか。一方で、さまざまな矛盾を抱え、『問題行動』を伴いながらスタートしたクラスが、2学期になると少しずつ落ち着き、しつとりした雰囲気が変わっている…。春を待つ教師になってはいけない。秋を待つ教師になれ」と。

生徒との関係がしっくりいっていない自分の姿を見透かされているような思いでそのことを聴いた。当時の私には、生徒たちの姿が見えず、彼らの内面にも思いを馳せることができていなかったのだ。全国的に校内暴力の嵐が吹き荒れた1980年代初頭。指導の難しい時代だったような気がしてならない。

思春期と呼ばれる中学校時代……。それは「第2の誕生」の時期ともいわれる。その貴重な時代を友だちとの関わりやさまざまな体験を通して、成功や失敗、挫折、後悔を繰り返しながら人は成長していく……。一見後退しているように見えても、内面ではもがき苦しみ、葛藤しながら成長していくのが中学時代だ。だからさまざまな誤りや問題を幾重にもからみ合わせつつ、しかし自立に向けて確かに発達・成長を遂げる不思議な美しさを持っている。それはちょうど、螺旋階段を登っていくようなものだ。

震災によって校舎が損壊した荒浜中は、逢隈中を間借りして学校を再開した。5月に行われた生徒総会で採択されたスロー

ガンは「Never give up く越えろく」。そのスローガンには、①困難や試練などがあってもあきらめずに取り組み、乗り越えていこう、②震災による勉強や部活に不利な状況を乗り越えてほしい、③荒中に戻れるまでどれぐらいかかるかわからないけど、そのときが来るまで荒中生という自覚を持ってあきらめずに生活していこうという3つの意味が込められていた。翌年の生徒総会で、生徒会長は「勉強や部活の面で限られた時間の中で皆が協力し、日々努力してがんばれた」「文化祭では一人ひとりが

手で考える



自分の役割を果たし、街道を歩く会では友だち同士で励まし合ってゴールを目指すことができた」「私たちが、『Never give up く越えろく』というスローガンを達成できたのも多くの人たちの支援のおかげでもある。これからもこの気持ちを大事にしていきましよう」と総括した。

今年、秋、荒浜地区には災害公営住宅が完成し、荒浜中も2学期には新校舎に入る予定だ。今年ほど秋が待たれる年もない。

(巨理・荒浜中)

真山 栄子

紙芝居「大造じいさんとがん」を作った子どもたちと、木版画『かるた』に取りかかったのは、教師5年目のことだった。

その『6の2かるた』が出来上がった時、職員室のサロンで、紙芝居『夕鶴』を作っていた小林真一先生に見てもらった。かるたは「父の日にはばこをかくす」「ミサイルより新校舎」「うっそーほんとうのぶりっこさん」「小遣いなくても遊べるよ」「廃品集めて紙芝居」……子どもの心情や生活、クラスの出来事と多岐に渡っていることを見て取り、「テーマがあるといいんじゃないか。」と助言を受けた。

小林先生は、歴史教育者協議会のメンバーで、地域教材を掘起こし、社会科のプランを立て実践していた。文科省が地域教材の大切さを言う10年前からだ。「一回行って教えられると思うな。」農家廻りに出かける時、そう言われた。先生の国語の授業「子うしの話」を参観させてもらったこともある。日曜日は、

『親と子で歩く郷土学習』に同行させてもらったりもした。

教師の仕事は、大変なものだ。全力で向かってもらった満足いかず、もっとよい実践をやらうとする先生がいる。新米の私は教育の技術もないけれど、それだけで終わってはいけないのだなと感じた。それで、職場の学ぶ雰囲気には押されて、学習会に出かけるようになった。

その中の一つに、宮城教育大学の「現職教育講座」から出来た『版画サークル』があった。美術の坂本小九郎先生に『かるた』を見せると「あなたは、かるたをやっていくといい。」と言われ、以来、それを守った。

2校目では、『かるた』のテーマを決めて取り組んだ。クラスの友達一人ひとりの良さを表した『1の3ともだちかるた』を作った。3校目でも、『4の1なかよしかるた』を作った。読み札の話し合いは、その子の良さを出し合って、一人ひとりを認

め合う時間になった。

かるたの制作は、スモールステップで、完成に向かつていく時間のかかる作業である。自分の思いを描いたら、白黒に簡略化して下絵を完成させる。教師は、全員に声をかけて、子どもが表現したいものを理解し、そのための助言をする。子ども一人ひとりと話すことで、子どもとつながれる時間でもある。丁寧に集中して彫る。油性インクをつけて、バレンできれいに摺り上げる。軟らかい和紙など、ものに対する優しさも知る。和紙を台紙に貼り合わせる作業を根気よくやり通し、1セット自分のものを手にした時、クラスのみんなで協力したこと喜びを感じるようになる。かるたづくりは、私のやりたい授業になった。

ひとつのことをやり続けると、授業の課題だけでなく、学級

教師としての宝物



わたしの春休みが一番大切な仕事は、ノートづくりです。年間計画や学級の時間割はもちろんのこと、名簿や校務分掌、清掃分担なども貼り付けていきます。担任する学年によって『出会い』の授業を成立させる13のポイント』や『荒れ・暴力の背景分析10の視点』などつい忘れてしまいがちなことを思い出すために貼ることもあります。毎年必ず肝に銘じるために貼っているものがあります。それは初任だった角田小学校で遠藤惟也さんが提起してくれた1年間の見通しです。「5月・10月ヤマを過ぎ、目玉ひんむく1・2月、やっとな花咲く3月の末」とい

経営において、自分の足りないことが見えてくる。昨年度は5校目で9回目の実践となり『4の1友達カルタ』ができた。これからも自分の小さな実践を続けていきたい。

〈感想から〉

○ みんなの作品を見て、一人ひとり彫り方がちがうし、彫り跡もちがっていいなあとか、きれいだなあとか思った時に、ふと、ある言葉が浮かんできました。その言葉は、『みんなちがって、みんないい』です。(A・S)

○ 怒ってばかりの私に、子どもの良い所を話してください、(手)を使う授業で育てていただきました。今こそですが、子どもの成長のベースを認め、自分も成長しなければと考えるようになりました。(K・E母)

(仙台・東仙台小)

佐々木 大介

うタイトルでー見通しを立て、ふしめ節目の危機をのりきれる実践をーというサブタイトルがつけられています。

そこにはめあてとして次のことが掲げられています。

ひんむく1・2月、やっとな花咲く3月の末、のりきれる実践を

	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
神宮大会												
休まず続ける。												
マラソン・縄跳びなどの運動を続ける。												
神宮大会												
休まず続ける。												
マラソン・縄跳びなどの運動を続ける。												

● 別の運動・別の会、別の命(歌壇力とか協力とか闘闘力などを向上させる)
● 運動の時間、ふれあいタイム、学習時間などの時間
● 運動・会合などの時間を月に計画を設定して、(体育、音楽の時間を活用して)
● 児童・保護者・職員などを活用して、その場

○ 発表のための発表ではなく、日常の実践の積み上げを大切にしたい。

○ 行事の一つ一つを節目と考えて、そこまでに「どんな能力や態度」を「どのようにして育て」そのうえで「どんな児童（人格）に育てていくか」しっかり見通しを立て着実に実践を進めていくようにする。

○ その時になって慌てないように4月から学年で目標を持ち、計画をたて、同じ歩調で一歩一歩実行していく。

1年間の見通しを持って実践していくことなど当たり前のことなのですが、今の超多忙さに直面すると、つい目の前のことだけで精一杯になってしまいがちです。その場を乗り切ればいいかというわたしの甘い気持ちにカッツを入れてくれるのが惟也さんが残してくれた1枚の見通しを持つための構造図です。

たくさんのエールを胸に刻んで



内海 泉

「先生にとっては何十人の中の一人かもしれないけど、私にとってはたった一人の大切な息子なんです！」と言って「ガチャン」と電話を切られ、青くなってその子どものお宅に謝罪しに行ったことが昨日のことのように思い出される。

当時、新任2年目で6年生35名を担任し、悩むことが多かった日々。

子どもを下校させ、少しほっと一息ついていた時のこと。職員室の電話が鳴った。友達にいじめられがちだったO君の母からの抗議の電話だった。「赤白帽子をかぶっていて、強く友達に

25年経つても色褪せるどころか、「大ちゃん、

節目の行事で子どもたちを見通しをもって育てているかい？」という声が聞こえてくるかのように自分に迫ってきます。

私のノートが続く限り、1ページ目に必ず貼り付けていくことでしよう。これがわたしの『教師としての宝物』です。

(仙台・八木山南小)

引っ張られて、ゴムひもが切れた」とのことだった。初任担当の先生に事情を話すと、すぐに家庭訪問をして、お母さんと話をし、謝罪してくるとよいと言われ、すぐに伺った。どんなにご立腹かと恐る恐る訪問したのだが、話をしていくうちに、「先生も、若いのに、大変だよ。いろんな子どもがいるから。でも、親は心配なの。だからつい、私もかっとなつて。これまでもいろいろあって。親は学校についていくわけにはいかないから、先生も大変だけど、ちゃんと子どもたちを見てほしいの」と話をされ、子どもたちの交友関係や悩みまで、あまり見えて

「5月・10月ヤマを過ぎ、目玉ひき見通しを立て、ふしめ給日の危機も」

内容	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
	上	中	上	中	上	中	上	中	上	中	上	中
児童生活	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
運動	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
学習	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
生活	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
健康	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
安全	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)
その他	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)	リレーバレー(新年度)

1. めあて ○ 発表のための発表ではなく、日常の実践の積み上げを大切にしたい。 2. 一つ一つの行事を節目と捉えて、そこまでに「どんな能力や態度」を「どのようにして育て」そのうえで「どんな児童（人格）に育てていくか」しっかり見通しを立て着実に実践を進めていくようにする。

○ その時になって慌てないように4月から学年で目標を持ち、計画をたて、同じ歩調で一歩一歩実行していく。



いなかっただ私は、申し訳ないという気持ちと情けない気持ちでいっぱいだった。

親としては、教師として経験も浅い私への不満もあったのだろうが、「学校のことば、先生であるあなたに任せるしかないのだから、しっかりと頑張つてほしい」という未熟な私へのエールのように思えた。

今もさまざまな課題を抱えた子どもたちと向き合う時、その子どもたちの背後にある家庭や親の存在を考えないことはない。条件なしで、子どもを丸ごと受け止めて、愛したり共感し合えたりできる存在、それは親であり、教師であり、その子を取り巻く周りにいる大人たちの特権であると思う。

私は、当時、地域の教育サークルや組合の学習会などで、たくさんの先輩方に実践や日々の子どもの接し方などについて悩みを相談し、教えていただいた。今思うと、私の拙い実践や悩みに耳を傾けて、本気で答えてくださった先輩方から得たものは、大きく、今の私の教師としての生き方の土台になった。「う

ミカン



初めて1年生を受け持ったのは20代後半でした。その頃は、自分のやりたいことを子どもに押しつけ、結果だけに一喜一憂していたように思います。そんな私の目を少し広げる出来事が秋に起こりました。

春に転校していった子どもの家からミカンが一箱、我が学級に届けられたのです。枝に付いたものまで入っていました。そ

まく、いかなくても、若いあなたが、そうして子どもたちと本気になって、何とか日々の取り組みを頑張ろうとしていることこそが、大切なのであって、だから、子どもたちは若いあなたでも、ついてきてくれるのだ」とそんなエールをいただき、受け入れてもらえることの安心感を自分自身も体験しながら、教師の仕事に情熱をもつて取り組むことができた。

だから、「子どもを愛する、かわいがる、受け止める」ことを教えてくれたたくさんの先輩方や一人ひとりがかけがえのない存在だということに気付かせてくれたこれまで出会った子どもたちや親たちに感謝したい。

「自分は、目の前の子どもたちと、きちんと向き合えているか？ 子どもを愛せているか？」今も日々、自問自答しながら仕事をしている。

さあ、今日もこれまでいただいたたくさんのエールを胸に、かわいい1年生たちと共に、奮闘しよう！

(石巻・山下小)

佐藤 正夫

の心配りがうれしく、すぐに子どもらの前に広げて見せました。まさにミカンの色と同じ黄色い歓声が教室中上がったのでした。こんなすてきな贈り物が届いたことを子どもだけでなく家の人にも知らせたいと思い、一人2個ずつ持つて帰るように話しました。

子どもたちは右手と左手に1個ずつミカンを持ち、匂いを嗅



いだり、重さを確かめたりどの子もにこにこしていました。そんなとき、マユミのミカンに目が止まりました。3個も持っていたのです。えっ！と思いました。私の話を聞き逃すような子ではなかったからです。見た瞬間、何て欲張りなんだろうとがっかりしました。なぜなら、マユミは心がきれいで、純真さに包まれているような女の子だったからです。物をなくしても見つかるまで何度も探すような子でした。自分だけが得をするような行動など微塵もない子でした。そういう子の中にも、こんな一面があるのかと暗い気持ちになっていました。

でも、何かが引つかかかっていて、すぐに怒ることはしませんでした。さようならをした後に、私はマユミに聞いてみたのです。するとマユミは、「これが弟のぶんで、こっちが妹のぶんで、これが私のぶん。」と、にこにこしながら教えてくれました。ほうほうそうかくそうかく、私はいたく感動し、マユミの頭をなでて帰してやったのでした。何ていい子なんだろうと思いま

私を育ててくれた子どもたち

私はだめな教師だった。などと言うと、今はいい教師のようでおこがましいが、あの頃より少しはましな教師になっていると思う。

どんなだめ教師だったか。……子どもを荒らしてしまっていた。

私の教師人生はあと8年。若い先生たちに、私と同じ轍を踏まないで欲しい。その思いで、私の苦い経験をお話ししよう

した。

私が2個と言ったのは、単なる計算上の数でしたが、マユミはそういうところで動いていたのではなかったのです。ミカンを分け合って一緒に食べている兄弟たちを想像し、自分と同じように喜ばせたいという「気持ち」で動いていたのだと分かりました。1個多いからと取り上げて帰すのと、いい子だねえって3個持たせて帰すのでは、天と地ほどの違いだったと思います。

それ以来、みんなと違う動きをする子どもを見るのが楽しくもなりました。もちろん怒ったり、怒鳴ったり、命令したりもするのですが、彼らを突き動かすものが何なのかを少し探れるようになった気がします。それを教えてくれた子どもらの代表がマユミなのです。

(仙台・川前小)



矢部 智江子

思う。

新任、5年生担任で、クラスにはいじめがあつたが、1年の終わりににはなくなり、私は少しの達成感を持って、次の年を迎えた。

2年目、また5年生。そこには強烈なNくんがいた。授業を妨害し、私に対しても反抗的な態度だった。私は頭では「この子に寄り添う」とか「この子をクラスに位置づける」と分かっ

ていたし、いろいろ試みたが、態度は変わらず、どうしても好きになれなかった。クラス全体としては荒れなかったが、Nくんは荒んだまま進級させてしまった。

私を決定的に打ちのめしたのは、3校目の6年生、Iくんだった。授業を妨害し、注意する私に対して強く反抗した。同調する男の子が4人いて、もう学級は崩壊状態だった。何とか卒業まで踏ん張ったが、ひとりの女の子に「先生はなにもしてくれなかった。」という手紙を突きつけられた。私が今まで学んできたものは何だったのか、私の何がだめだったのか……その時は分からなかった。教師を辞めたいと本気で思った。

大きな学校に疲れ果て、私は小さな学校に移った。全校70人程度の学校は、荒れる子どももなく、私はとても癒された。そして少しずつ自信を回復していった。

その間、とにかく初心に戻って学ぼうと、いろいろなところに出かけた。東京や埼玉にも行き、著名な先生の授業も見えたりした。講演会や学習会にもたくさん参加した。貪るように本も読んだ。(私の何がだめなんだろう……。) いつもいつもそれを考えていた。

そしてあの日が来た。2011年3月11日。私はあの地震で、教師人生を大きく揺さぶられた。(今まで何をやっていったんだろう。日本は、世界は危機的状況だ。子どもを育てる最前線は私たち教師だ。私たちがしっかりした主催者を育てていなかったから、こんなことになったのだ。子どもたちを荒らしている場合ではない。)と。

私の本気が変わった。まずは子どもたちをしつかり躰けて、本気で学習させようと思った。今までの私とは気迫が違った。

今の学校に移って1年目、2012年、4校が統合して始まった学校の1年生主任になり、Rくんを担任することになった。

既に保育園で、大人や教師を自分の敵と想ってしまった。教室をすぐに抜け出し、わがまま放題に振る舞った。まず私はRくんを、徹底して可愛がろうと決めた。しかし決して甘やかすのではなく、やらなければならぬことをやらなかった時は、思いっきり怒った。とにかく厳しく躰ながら可愛がった。そしてRは、教室でしつかり勉強できるように成長した。

昨年は5年生。4年生の時に大暴れして、学級を崩壊させていたAくんを担任することになった。Aくんは発達障害を持っていた。そして周りの何人かが彼が暴れるのをおもしろがっていた。私はまず、発達障害を持つていようが、だめなものだめ、Aくんも周りも授業を妨害することは、許さなかった。私には伝えたいことがたくさんあるのだから、荒れている場合ではないと何度も話した。そしてAくんの話をよく聞き、将来一人で自立して生きていけるように、Aくんともお父さんともよく話をした。Aくんは授業中はクラスで一番集中して発表してがんばっている。周りでおもしろがる子はいない。

私は震災を体験して、「共感」ということの重要性を、頭でなく感覚として分かることができたのではないかと思っている。だからといって、荒れを見過すのでも、放っておくのもない。以前の私は、荒れている子も辛いのだからと、厳しい要求が出せないでいたのだと思う。今は、可愛がりながら、だめはだめと厳しく要求している。

これからも何のために教師をしているかを見失わず、一人一人が未来をつくる大事な子どもだということを肝に銘じてたっぷり愛情を注ぎ、成長させたいと思っている。

(黒川・大郷小)

大学院のときに、「うちの学校に
来ないか？」と声をかけてくれたの
が平野正美さんだった。あれから15
年になる。平野さんは民舞教育の第
一人者として、東京の公立小学校か
ら和光学園和光小学校に移られ、長
年活躍されていた。

就職したばかりの4月のある日、
「東田さん、沖繩行こう」と、いきな
り誘われた。何が何だか状況の飲み
込めない私に、平野さんは

「沖繩で『花やから（子ども
たちの舞踊集団）』の旗揚げ
公演があるから、行こう！
そして舞台に出よう！」と。
突然のことでよくわからな
いまま、でも、結局私は「日
帰り」で沖繩に行くことにな
った。初めての沖繩は、
すさまじい強行日程だった。

沖繩に着いて―着替えて―化粧して
―舞台、観光する間もまったくなく、
帰りの飛行機に飛び乗った。そんな
短い沖繩珍道中のなかで印象的だっ
たのは、平野さんにかげられる「よ
く来てくれた」、「やっぱり平野さん
という地元の皆さんの声だった。「人
との関わり」を大切にする平野さん
を、そのとき感じた。平野さんとの「日
帰り」旅行は、その後も「寺崎はね
こ踊り」、「衣川神楽祭り」と続いた。

いろんなところに一緒にワゴンで行
くなかで、「現場に行く・地元に行っ
て学ぶ」ことの大切さも教えてもら
った。

学校でも平野さんは、子どもとの
関わりを大事にする教師だった。毎
日出る学級通信には、子どもたちと
の関わりや出来事が（こと細かく）
つづられていた。例えば、こんな具
合だ。

わたしの出会った先生 7

平野さんに誘われて15年

東田 晃



事実（本当はそういうアタリをつ
けていたのかもしれない）が見えて
きて昼休みは話し合いで潰れ、もち
ろんタンメンは伸びきった。〇くん
のお悩みについての通信は、それか
ら3日も続いた。

そんな平野さんだから、職場のみ
んなに推されて管理職にもなった。
クラスの子どもや親とうまくいかな
いときなど、何度も助けてもらった。
中野七頭舞の授業の時もひよっこり

1年生の子どもたちにアイヌの話を
してくれた。踊りや自然、絵本、い
ろいろある中でもアイヌの人たちが
受けた差別の一つである「アイヌ勸
定」の話を織り込み、「人が人らしく
生きる（アイヌネノアンアイヌ）」と
はどういうことか話してくれた。子
どもたちへの話にも、アイヌの方々
とのこれまでの交流がにじみ出てい
たように思っただ。

今年度、私は和光学園の

「長期研修制度」を利用して
沖繩に1年間住み、琉球民
謡・沖繩の芸能を中心に研
修をしている。やはり「地
元の香り」というものは、
その土地の空気を吸わない
となかなか掴めないものだ。
文化や芸能の持つている面
白さを、人とのつながりの
中でしっかり感じていきたいと思っ
ている。同時に沖繩にしていると、今、
日本という国に起こっているとでも
アヤシイ動きの影響をヒシヒシと感
じる。その辺りをちゃんと見つめる
目を、今の子どもたちにも持たせて
行きたいと思う。

そういう姿勢を学ばせてくれたの
が、平野さんの生き様だったように
思う。

（東京・和光小

昼に店屋物（和光は給食でない）
のタンメンを注文した平野さんが、
楽しみに職員室へ向かおうとすると、
ちよつとのんびり屋の〇くんが相談
事があるという。普段はあまり先生
に話しかけて来ない彼の相談だけに、
タンメンは気になりつつも聞くこと
に。ところが途中からタンメンのこ
とはそつちのけ、むしろ話を終えよ
うとする〇くんを引き止めてまで悩
みを聞き出す始末。思っっていなかっ

そんな平野さんが亡くなったのは
2009年だった。入院の直前、学
校の「いちようまつり」が近づいた

3・11 3年すぎた今、私は

予想もしていなかった 人生を歩んでいる

菊田 絹子

「今、何か仕事しているの？ せっかく仙台に住んでいるのだから役員をしてみない？ 大丈夫できるから」

それは、2011年8月頃でした。

退職2年目の私はその頃の仕事もしていませんでした。ただただ毎日しっかり食事をとって、テレビニュースにかじりつき、その日その日を元気に過ごすことに努めていました。

そして時々自宅のあった南三陸町に帰って、原爆投下直後の広島のような街の姿を眺め、仮設の町役場に張り出された犠牲者や行方不明者の名前を見て、その人数の多さと（先日お会いしたばかりの人が亡くなるなんて）と呆然と立ち尽くすことを繰り返し返していました。

ボランティアの方々が見つけてくれた家族の写真や父の位牌を持ち帰り津波の泥を洗い流しては干しました。津波の泥の臭いが当日を思い出させます。町に帰るたびに避難所に寄り、お世話になった人と近況を交換し励まし合いました。

しかし、仙台に戻ってくると街中は何事もなかったように人と

車が行き交い、沿岸部の津波被害が別世界の出来事のように感じるのです。

そんな時に、退職女教師の会の先輩から役員にならないかという誘いを頂いたのです。

「私にできることでしたら、やります。毎月、会議に出ればいいんですね？」

と、簡単に引き受けてしまいました。自分も何かの役に立つことをしたいと思っていました。

そう思うようになったのも、震災に遭って関わった方々の姿を見たからです。

3月11日の大震災で我が家は流失してしまい、3週間ほど小学校の避難所でお世話になりました。

避難所では役場職員が自分の家族が被災しているのに、避難民のお世話をしていました。現職であつたら、自分も同じように職場であるように働いていたはずでした。また、津波の被害を免れた隣の地区の人たちは、翌12日の夜明け前からコメを持ち寄りお握りを握って、自衛隊が支援に来るまで毎日届けてくれたのです。仕事を休んでテント持参でボランティア活動に来てくれる人、ホテルに宿泊しながら避難所支援をしている人。名も知らぬ人々のおかげで私は毎日生かされてきました。

その後、高齢の母を心配した友人が、仙台にある自分の持ち家を使うようにと言ってくれました。被災した自分の町を離れ、自



分たちだけが楽な住まいに移ることに後ろめたさを感じました。皆が苦しんでいるときに、自分たちだけそこから逃げ去るようになるのですから……。ずいぶん迷いましたが、避難所暮らしがいつまで続くか予想がつかない状態でしたので、友人宅に住むことにしました。

着のみ着のままの状態でしたので、生活に必要なものが揃っていた友人の家に着いてホッとしました。さらに、隣に住んでいる方が、「今、仙台は市ガスが止まっているから不自由でしょう」とおっしゃって、卓上ガスコンロと瞬間湯沸かし器、食料を用意して待っていてくれたのです。

仙台に移り住んで1週間ほどした頃、母親連絡会の方が訪ねてきてくれました。被災者をまわって支援物資を届けているのと、と、下着やパジャマを持ってきてくれました。困っているものはないかと尋ねられ、

「逃げる時、長靴をはいていたので、普通の靴がないの!」と話す。

「用意がないから、私の靴でよかったです」
と、自分の靴を脱いで提供してくれました。現在も大切に使用させていただいています。

友人・知人、親戚、知らない人々。他人が困っているとき、自分の生活を顧みず力を貸してくれる人々が本当にたくさんいることに驚きました。

退職する前は、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」と力説していたのですが、それをこのような形で、自ら体験することになるうとは思っていませんでした。

しかし、こんなにたくさんの方の善意を「もらう」ことなど経験したことがなかったため、心苦しく、自分は今まで他人のためにどんなことをしただろう、と恥ずかしくなっていました。

また、避難所を早く出て仮設住宅に住まなかった自分は、被災地で復興のために努力している人たちと比べたらずっと楽な生活

をしているようで、故郷の人々に負い目も感じていました。

この気持ちから、もっと前向きな気持ちにならなければ、津波から生き残った甲斐がありません。私が受けた恩に応えられるかどうかはわからないけれど、自分の経験が生かせるのであれば、そこでやれることをしようと思いました。

私のできることはそう多くはありませんが、先輩の言葉をきっかけに、役員の仕事のほかにも近くの小学校の防犯パトロールのボランティア、被災地の中学校の学習支援等の活動にも参加しています。可愛らしい小学生が喧嘩して泣いているのを慰めるとき、「さよなら」と挨拶を交わすとき、中学生と一緒に数学の問題を解いたとき、生徒の話聞いているとき、自分もこの子たちの役に立っているのかなと思いました。

そんなことに関わりながら、故郷を離れて生活している意義をそれらに見出せればと願っています。

津波を体験し被災したために、予想もしていなかった人生を歩んでいる今日この頃です。

(みやぎ教育相談センター)

生かされた命が 私を動かした

阿部 美弥子

あの日・・・

床が揺れ始め次第に立つている体は机を支えにしないと立つて居られない程になり、倒れそうなパソコンを支える。机や棚の書物は崩れ落ち、揺れが長いと感じ、一瞬、これ以上揺れが大きくならぬことを社員全員の頭をよぎる。漏れたら(放射能)死を覚悟しな

くてはいけない。

ここは女川町塚浜地区にある東北電力女川原子力発電所・4階の事務棟。揺れが収まると社員全員高台のバスの待機駐車場に避難。そこから見たのは1メートルほどあげ横に移動していった白い波しぶき。港が全滅する……と波の怖さの知識がない私でも分かった。放射能漏れがないことが確認されてから持ち場に戻り、瞬時に災害対策がとられる、深夜私の耳に入ってきたのは「水漏れ」の事故対応。

ライフラインが途切れ、家族の安否が気になる。高校2年の娘はカヌー部で北上川での練習だったため満水し引き波に襲われたら生きていない、自分だけ温かい箱（事務棟）の中にはいけない、何十とある電力との下請会社の社員が何百人と連なってコバルトラインを歩いていると聞き、家に戻ろうと決意し、送迎バス30分のところを4時間30分歩く。

道中の光景は道路の陥没、傾いた電信柱には養殖用の網や浮きがひっかかり、海岸沿いの民家は家の基礎部分だけを残して姿はない、山裾はエグリ取られ、同級生のプレハブの事務所はガードレールにのっかかり、停泊している船の姿はない。

飯子浜地区で男性8人がブルーシートで覆ったベニア板を運んでいた。見つかったご遺体を民間の加工場の冷凍庫に一時保管するらしい。また6人見つかったくないと話す。

途中、先が見えない真っ暗なトンネル2本を抜けないと帰れない。闇の中に落ちていくような、おきている現実が夢であつてほしい、みんな生きていて……と手をあわせ祈る。止まらない涙をぬぐいながら、それでも歩く足は止めず、地面を一步一步確認しながら……針の穴からだんだん灯りが大きくなる頃には「きつと何人も亡くなった、自分が強く生きなくては。これが現実、しっかりと見て受け入れないと……」と自分に言い聴かせ涙はここで封印する。

眼下に広がる光景に目を疑う。友達・同級生・ここに住んでいたおじさんの家がない、足が止まって動けない。壊れた家の瓦礫

でぐちゃぐちゃ。焦げてはいないだけの広島・長崎の原爆の跡のよう……。

避難所を巡る

この状況がいつまで続くかわからない。サバイバルの始まり。子どもが生きていたことで力が湧いてくる。東日本大震災二日目から避難所に自宅にある衣類・毛布・備品運びが始まった、家が流された友人・同僚・子どもの頃からのお店のおばさんたち23組に配り歩いて10日。同級生で同僚だった友人の遺体確認をする。固いもので顔がつぶれ家族も知らず安置されて2週間が経つ。お腹の手術痕と衣服で間違いなかった。つぶされそうな罪悪感で家族へ連絡を取り、引き取りに来てもらう。罪悪感……震災の3年前に看護師の彼女に仕事を紹介したのは私、大学進学の子息さんがいるため「仕事ができて良かった」と感謝されたが、津波が息子さんたちから奪った。（私が仕事を紹介しなければ……）という罪の意識にかられ、人のために何かしなくてはと、私をつき動かした。

女川町の清水地区に訪問介護中のヘルパーさんは、片麻痺で杖をつく女性と3階から一緒に降りてきたが、女性が通帳を忘れた。保健証を忘れた・年金手帳もと3回部屋に戻り、「ハンコ」と言われたが「波がもうそこまで来ているから逃げないと」と女性の手を握るがはらわれてしまう。ヘルパーは幼い二児の母。自分が死んで子どもたちが……と意を決し必死で木によじ登り難を逃れた。どうやって家に戻ったのか覚えてはいない。私のせいでは……



と自分を責める。眠れない日が続き瘦せた。半年後ケアマナージヤ―として仕事をすることが精神的バランスが保てず3か月で辞めてしまう。

彼女を救ったのは子どもたち、子育てに専念することで心のバランスが保たれ、今は介護員とはまったく別の仕事をしている。

唯一なんでも話せた友人の棺に収められた顔は穏やかで傷もなく、所長を務めた彼女は自分の仕事を全うできたと言わんばかりの表情で救われた気になった。

大切な人を奪った津波を恨んでも恨みきれない。体育館までの道中毛布にくるまれ長靴の足だけ覗かせたご遺体は夕方にしか引き取りに来てはくれない。バチが当たったと言った議員がいたが、バチではなく「試練」だと思い、ならばこの試練を乗り越えてやるうと思った、電気がないから陽が落ちる前に夕飯を済ませる。日暮れにはろうそく一本の灯りを子どもたちと囲み、「この体験は貴重なのだからこの震災を乗り越えてこれからの自分の人生を強く生きるんだよ。ライフラインもなく物もない中で工夫が生まれる、どんな苦労も乗り越えられる人になろう。亡くなった人の分まで……」と語り合った。

「小町通信」の発行

震災から2週間が過ぎる頃、もっと自分にできることはないかと臨時の窓口・社会福祉協議会を訪ねた。そこで出会ったのが東京江戸川区から石巻・女川にボランティアにきたと整体師Mさん、一人でできる整体を教えて気分転換させたい、地理が分からないと言っているので同行することにした。

私は散髪を、避難所3か所しか回れなかったが喜んでもらい、手応えを感じる。移動中の車中でMさんに言われたのは「後世に残すよう何かやりましょう」。その肩を押された私にできることは書くこと。飾らずダイレクトにその時の言葉でと始めたのが「小町通信」、Mさんが新聞メディアから女川の情報をピックアップして編集してくださり平成11年6月から発行してNo.25まで続ける。

癒しの場として居酒屋を

応援の現場作業員は宿泊先の不足で仙台・多賀城・利府に宿をとり、女川・石巻に往復4時間かけて通うこと2年。ストレスも溜まる、息抜きに飲食店で美味しいものを食べ酒を飲みカラオケに興じる。震災3か月後から仙台や各地の飲食店は「震災パブル」といわれる程の賑わいをもたらした。

この時、私も「生かされた命、欲も何もない今、震災で落ち込む日々の中、人間気分転換が必要。リフレッシュする・話を聞いてもらう空間・癒しの空間・現実を忘れるひととき・ストレスのはけ口・明日への活力のために飲食店の存在はなくてはならないものだ」と感じた、その空間を提供しよう、私がお店をやるうと決心した。

3年を「区切り」と考えられる人、心の整理をつけ前に進む人がどれだけののだろうか。考え方の転換で、亡くなった人の分まで生きてやると心いきみをさせてほしい。残された命・助けられた命・生かされた命を粗末にせず輝いた人生にして欲しいと思う。島・浜・港関係（養殖も）・工場の仕事をしてきた方々は「俺たちにはこれしかない」と拳を握り立ち上がった。それに関わる業者も「それなら」と協力する。それがうまくマーケティングでき「商売」ができ潤ってくれたらと願う。

開店して11か月を過ぎようとしている今、お客さんが「人のために仕事をするのが一番のやりがいだ」と話す。日本人の特徴でもある「人のために」笑顔のある付き合いをしたいから。全ての人に、震災でなくした笑顔を、時間がかかっても取り戻せる社会になつてほしいと思う。



子どもの声に 耳を傾けながら・・・

大崎 聡

「僕は、なんてダメなんだ。」と、ガツンガツンと床に頭をぶつけるR。私は「分かったから、やめなさい。」とRを制止していた。

学芸会の練習最中、体育館を走り回り、赤白帽子をボール代わりにバスケットゴールに入れ、遊びまわっていた。担任が注意をしても、言うことを聞かず、「もう僕は、できるんだから。」「ちゃんと話を聞いているよ。」「ここで、踊るよ。みんなとはしない。」の一点張りである。それを見ている周りの子どもたちもあきらかめ顔で、練習に集中できる雰囲気ではなかった。たまたま私は、「何をやってるんだ。」と大きな声で一喝した。その直後、Rはいつものごとく、暴れだし、自傷行為に走った。

私は、県北の学校で、2年生を担当していた。クラスは、2クラス。もう一人は、若い女の先生である。彼女よりも年かさである私は、学年主任として常日頃から相談を受けてきたが、一向にRの状況に明るい光が見えず、試行錯誤の毎日だった。この出来事を機に、本格的に、外部機関との連携をはかり、RはADHDと診断されることとなる。今は3年生となり、薬を飲みながら気持ちをコントロールして新しい担任と頑張っている。診断を受けるには親の同意が必要であり、隣のクラス担任と私の昨年度の取り組みを報告したい。

4月

Rは転校してきた。親の転居に伴う

転校だった。前の学校でも発達障害を疑われ、学校の対応に不満をもった母親が、転居を決めたのが理由だった。「暴れて窓ガラスを割ったり、投石で近くの人の車に傷をつけたりと、落ち着いて学習するまでには、至らなかつた。」と前の学校から引継ぎを受けた。母親から話を聞くと、言い分は異なり、「発達障害だと決めつけられ、特別支援学級に入れられそうになった。息子はきちんと話せば、分かる子どもだ。ほかの子どもと違うところは確かにあるが、発達障害ではない。」とのことだった。「まずは、Rのことをよく見て、話を聞こう。何かあったとき、隣のクラスも私が一緒に見るから、話を聞いてあげてね。」Rの担任と年度当初確認した。

新年度がスタートすると、様々な問題が起きた。一緒に帰っていた女の子の傘を折り曲げたり、地域探検では石蹴りをして近くに止まっていた車に傷をつけたりした。その都度、理由を聞き、どうしてそうなったかを考えさせた。新しい学校ということもあり、教室の抜け出しは少なかつたが、次第に増えた。休み時間には、終わっても教室に戻らないことが多く、担任が迎えに行った。教室に補助教員が5月から配置された。Rのことを見てもらえる大人が一人増えるだけで、とても心強かつた。

6月

あることがきっかけで親との交流が始まった。「Rが下校時、上級生の3年

生をたたいて逃げた。」と学校に連絡が入った。「またか。」という思いで、忙しさをいさなな「どう対応するか。」「面倒だなあ。」という思いもあつたが、家庭訪問し話を聞いた。家に着くと、母親も「またか。」という思いで叱責し、Rは泣いていた。なだめながら話を聞くと、「一緒に帰りたい同級生から前を歩いている3年生にバカと言ったら、一緒に帰ると言われ、バカと言ったらけんかになった。」とのことだった。すぐに、その同級生の家も訪問し、事実を確認した。その同級生も冗談で言つたつもりが、まさか本当に言うとは思つていなかったようである。冗談でも言つていいことと悪いことがあることを指導し、その事実を母親に報告した。このあたりから、母親の対応に変化が見られた。今までは、どちらかという和学校に対して否定的で、連絡を取つても対応が義務的だったが、少しずつではあるが、信頼を寄せてくれるようになってきた。

8月

夏休み明け、Rの行動はさらに激しくなつていった。1学期もあつたが、高いところが好きで、階段の手すり上ったり、窓に上つて騒いだりしていた。2階のベランダに上り歩こうとしているところを別の先生が見かけ、教えてもらった。このままでは、Rを守り切れないことを実感した。

教育相談で、「Rに合わせた学年・学級運営には限界があること。」「Rを常に

見守る体制を作るには困難が多いこと。」

「教育的なケアだけでなく、医療的なケアも必要だと考えていること。」を伝えた。母親からは、「家では、まったくいい子どもであること。」(のちに、厳格にRをしつけようと苦労していることが分かる。)「しかし、何かあったとき、心配であること。」が語られた。年度初めを考えると、だいぶ距離が縮まっていると感じた。

10月

学芸会の練習での出来事を話す中で、「お医者さんに相談してみます。」と母親自ら受診の予約を取っていた。その中で「周りの子どもと違うことは気付いていたが、もう少し大人になれば何とかなるかもしれないと思っていたこと。」「発達障害という診断を受ければ、特別支援学級に即入級することになるかもしれないと不安だった。」ことが語られた。

「親の思いや悩みにどう寄り添うか」を大切にしようねと、クラス担任と話してきたことが少しずつ実を結んできたかもしれない。

1月

Rの行動は落ち着きを見せてきた。今までの行動がすべてなくなったわけではないが、ある程度担任の指示が通るようになっていた。

子どもの声にならない声に耳を傾け

る。親の悩みに心を寄せる。言葉では理解しているが、現実には容易でない。じっくり分析して対応を考えて進めていきたいと思うが、即対応を迫られることも多い。うまくいくことばかりではないが、誠実に、謙虚に、子どもたちや保護者と関わっていききたい。

子どもの姿に学びながら、子どもとともに歩んでいこう。

(小学校教師)

新高校入試を考えるために

〜二回目の入試を終えて〜

高校入試110番から

見えてきたこと

村上智志

が不合格になった。

しなくてもいい不合格の体験をさせられた生徒の気持ちを考えると、憤りを感じざるを得ない。

「高校入試110番」に寄せられた電話は、昨年度の3倍にもなる67件。そのうち40件以上が前期選抜試験への不満、廃止要求であった。こんな声も寄せられた。

「全国では前期入試をやめている県があるのに、どうして宮城県は実施しているのか。今日まで後期入試の学校を決めなければならぬが、気持ちの整理がつかず決められない。子どもが悩んでいる。子どもの気持ちを考えるとつらい。」

「〇〇高校を受験して不合格。ショックで学校に行かないと言っている。何で落ちたのか分からない。一生懸命やったのに。」「子どもの前では泣けないので。」という涙声の電話。私はこの電話のお母さんの声が忘れられない。

2013年度から始まった新高校入試制度。前期選抜で昨年度は5000名を超える生徒が不合格。今年は4000名を超える生徒

ある中学校の教師は、「前期選抜は合格すればラッキー。不合格になっても後期は大丈夫だから、同じ高校を受験しなさい。」と話していたが、実際に不合格になってしまうと、気持ちの整理がつかず、ランクを下げて、自分の希望する高校ではない高校を受験してしまう生徒もいた。」と話している。

15歳の生徒の心を傷つけてしまっている現実が見えてくる。さらに、こんな声も。

「前期入試の意味は何か。娘よりも評価の低い子のほうが合格した。娘は受験しなかった。受験すれば良かった、と言われた。前期の可否が友達関係にも響く。昔のように一本にしたらどうか。今の教師は、受ける、受けるな、とも言わない指導をしている。この制度はやめたほうがいい。県の教育委員会にも言いたい。教育委員会は子どもの気持ちが変わるのであるか。自分の子どもは高校に進学するが、中2以下の子どもを持つ親にこの問題をぜひ知ってもらいたい。」という怒りの電話。

本日に、県の教育委員会は、子どもたちの気持ちがわかるのだろうか。

教育委員会に対する怒りの声は他にも寄せられた。

「前期入試が、国語・数学・英語だけなのはなぜか？ 理科・社会が得意な子はどうするのか。調査書点の客観性も疑わしい。学校や教員によって評価が違うのではないか。今回の制度はむしろ改悪ではないのか。うちの孫は、実力テストの成績はいいのに、苦手科目の評定が低くて、前期に出席できなかった。受験生の心を惑わすような制度は、やめてもらいたい。教育委員会の人間には、実際に試験を受けて体験してもらいたい。そうすれば、この制度のおかしさがわかるはずだ。」

本日に、県の教育委員会の方々に体験してもらいたい。

子どもたちの気持ちにも揺れがみられる。「自分が入りたい高校」ではなく、早く合格したいがために、「自分が入れる高校」を前期選抜で受験する。本日にいききたい高校とは違う高校を受験した現実があった。

県の教育委員会は、2015年度の入試から、「前期選抜の枠を広げてほしい。」という方針を出した。しかし、それはあくまでも各高校の判断になる。今年度の仙台一高のように、前期選抜の倍率が5・91倍という事態が起こらないという保証はどこにもない。

私は、昨年1年間、県の教育委員会を毎月傍聴してきた。教育委

員の方々は、

「前期で不合格になっても再度チャレンジする高い志をもってほしい。」と口々に言ってきた。「時間をかけて話し合い決めた制度だから、早く定着させるために努力してほしい。」とも。

入試110番の声にもあるように、これほど問題が出ているのに、まだこの入試制度に固執するのだろうか。

生徒・保護者のために、早急に、前期選抜をなくし、3月の受験1回（2次募集は残す）の制度に移す作業に着手するべきである。

（宮城県教職員組合）

新高校入試制度について

思うこと

四倉 俊 夫

先日、来年度の公立高校入試に関して、前期選抜の定員枠が拡大されました。

これは、かねてから批判の多い、前期選抜の合格者数と不合格者数の差があまりにも大きい問題に対する改善策と考えられます。

実際、前期試験で不合格になった生徒が進路変更を余儀なくされたり、意欲を失ってしまい、後期試験に十分に対応できなかった事例の相談が、宮教組にも多数寄せられ、問題になっていました。

県教委の今回の対応は、一見適切な対応のようにも見えます。しかし、ここで冷静に考えなければならないのは、この対応は、新高校入試制度を巡る諸問題の、根本的解決にはならないということです。

そもそも、新高校入試制度は、保護者や生徒、教師等からのアン

ケートを元に、生徒の受験の機会を増やすという趣旨で検討が始まり、実施されました。しかし、その検討過程で発表された内容は、保護者や生徒、教師の願いとはほど遠く、いい生徒を青田買いたという高校側（特に進学校の？）の願いと、大学進学率、特に有名大学進学率を東北一にしたいという県の意向（熱望）を反映したものになりました。

高校都合による、様々な「出願できる条件」の設定は、多くの生徒から受験の機会を奪いました。「評定による限定」は、多くの生徒を門前払いにし、失望感を与えるとともに、中学校現場も様々な対応を迫られました。「部活動の成績」は、部活動さえがんばればという風潮や、部活動やスポ少を巡る保護者と学校の摩擦を生み出しています。そして何よりも、各高校がばらばらの考えで「出願できる条件」を設定するために、生徒は受験校選びに四苦八苦しています。

さらに、各校の「学校独自検査」や学校独自の配点基準は、まさに高校側の都合だけを反映したもので、中学校現場と生徒、保護者を混乱の渦に巻き込んでいます。宮教組が毎回指摘しているように、前期選抜の試験問題の質にも問題があります。加えて、「自己アピール」は、完全に中に浮いてしまいました。

このように、実施前の、組合のみならず、現場教師や生徒、保護者の疑問や批判を無視する形で、「初めに実施ありき」で強行された新高校入試制度は、既に迷走状態にあり、当初の目的からは大きくかけ離れた怪物になってしまいました。大義名分を失った新高校入試制度は、小手先の小変更でどうにかなるものではなく、教育という崇高な理想に携わる者、宮城県民の、子どもたちの明るい未来に大きく関わる当事者として、県教委はその責任の重さを真摯に

受け止め、腹をくくらなければいけないと考えます。このような姿勢の県教委に、朝な夕な「責任」「責任」と責め立てられる現場教師は哀れなものです。

20年後、50年後の明るい教育の未来を考えたとき、教育行政のあり方の、根本的な見直しが必要な時期に来ているように思えます。

（加美・宮崎中）

S中学校前期選抜受験者の動向

高校名	前期受験者	合格者	不合格者	うち後期受験者	合格者	不合格者	後期希望変更者	合格者	不合格者
二 高	8	3	5	5	5	0			
一 高	8	0	8	6	3	3	2 三高へ	0	2
三 高	6	1	5	4	4	0	1 館山へ	0	1
館 山	2	1	1	1	1	0			
泉・英語	1	1	0						
泉 松 陵	2	2	0						
仙 高	1	1	0						
宮城 広瀬	2	2	0						
利府・スポ	1	0	1				1 仙商へ	0	1
宮工・化学	1	1	0						
大志・I部	1	0	1	1	1	0			
	33	12	21	17	14	3	4	0	4

N中学校前期選抜受験者の動向

高校名	前期受験者	合格者	不合格者	うち後期受験者	合格者	不合格者	後期希望変更者	合格者	不合格者
二 高	2	1	1	1	1	0			
一 高	3	1	2				2 三高へ	2	0
三 高	1	1	0						
宮一・普通	3	0	3	3	3	0			
宮一・理科	1	1	0						
館 山	2	0	2	1	1	0	1 私立へ	1	0
泉・英語	1	0	1	1	1	0			
泉・普通	3	0	3	3	3	0			
泉 松 陵	2	1	1				1 私立へ	1	0
仙 高	5	4	1				1 広瀬へ	1	0
宮城 広瀬	4	3	1	1	1	0			
利府・スポ	1	0	1				1 広瀬へ	1	0
宮工・器械	1	0	1	1	1	0			
宮工・電気	1	0	1	1	1	0			
塩 釜	1	1	0						
	31	13	18	12	12	0	6	6	0

小学校での英語教育

現場の課題

2月22日(土)「グローバル化と英語—日本の英語教育はなぜ混乱するのか」と題して、斎藤兆史さん(東京大学大学院教授)の講演会がおこなわれました。講演の後、小・中の現場からの報告がありました。その中から、小学校の教師、福井愛未さんの報告と、それに対する斎藤兆史さんの発言の一部をお伝えします。

小学校の英語教育を

担当して思うこと

福井愛未さん(小学校教師)の発言

私は現在6年生を担当していますが、前に算数少人数担当をしていたときに、週に1回だけ英語活動の指導をするようにいわれ4クラスの授業を担当していました。

前任校は、4年間県の英語教育の研究指定校で、全学年の英語教育に取り組んでいて、私はそのうちの前半の3年間、低学年と高学年をそれぞれ経験しました。その



時は、予算もつかず、何の教材もない中、英語教育では、文字を教えるなどということだったので、絵や画像をそろえようと先生方が知恵を出し合って工夫しました。ALITの先生に来ていただいたり、海外在留経験のある地域の方をゲストティーチャーとしてお招きしたり、英語塾を担当している方などの協力ももらいました。

現在勤めている学区の地域は経済的にも豊かな家庭が多く、英語を習っているお子さんがとても多いです。今担任している6年のクラスでも30人に6人ぐらい英語を習っています。中には幼稚園のイマージョンクラスで、朝から晩まで英語だけで生活する経験のあ

る子がいたり、帰国子女の子だったりする子がいて、週1回の自主ノートにすべて英語で文章を書いてきて、それを読まなくてはいけない、自分の英語力のつたなさを感ずる一瞬だったりするわけです。

私が考える英語活動のメリットは、子どもにコミュニケーションをとろうという気持ちの素地ができるかなと思います。それから、中学校の先生からは、英語を学び始める際のハードルとか溝が軽減され、構えないで学習ができると言われました。

デメリットではないかと思うのは、国語やその他の教科でもっといろいろ豊富な日本語というか、日本語の美しさも含めて表現力も読み取りの力も、もう少しつけてからでいいのではないかと私自身思っています。あと英語を3時間すると、また音楽や図工とか、芸術教育が減っていくのではないかと、芸術科目を大切にしない教育は、絶対心がすさんでしまうと思っています。芸術教科は軽視してはいけないと思っています。

それから、教師側のよいと思われる点ですが、私はあまりないかなと思います。教師が英語を教える際にどれくらいやってきたか。英語活動の準備の時間はとても不足している、毎日、6時間授業をして、3時半に子どもを帰して、そのあとの勤務時間で会議をして、ノートの準備



などをして、その中に英語活動の準備の時間がどれくらいさけるかということです。文部科学省は導入の際に、教科化はしない、領域である、文法は教えない、評価もしないと言ったのに、評価するようになって、先生方は苦しんでいます。前は英語ノートがあつて、そのノート用に一生懸命教材を作っていました。今は「ハイ・フレンジ」という教科書が配られています。ALITの先生方がこの教科書のCDやDVDを聞いて、この文法や単語はおかしい、と指摘する部分もあるので、小学校の現場の先生方に英語教育をしてもらうには、まだ時間も不足し、ハードルも高いのかなと思っています。

私自身、英語嫌いではないですが、苦手だと思います。耳慣れしていても話せないジレンマがあります。教員が

やって楽しくないと、やっぱりいろいろなこととは続かないんじゃないかと思っ
ています。今のペースならともかく、
小学校で英語を教科化していくなら、
これ以上のことは難しいのではないかと
というのが私個人の考えです。

福井さんの報告を伺って

斎藤兆史さんの発言

福井先生のお話を伺って、まず、文
字を使ってはいけないという、これは
すごい縛りですね。なんでこんなこと
をいうのかよくわかりませんが、ひど
いところでは、教育委員会の人があ
らなくて、教室に文字が書いてあると
これはおかしい、消してください、は
がしてください、と言ったそうです。
子どもは賢いもので文字で説明すると



分かる子も多いし、理解しやすい
場面もあるのです。それを文字を
使ってはいけないと一律に縛るの
は何とかなしてほしいと思います
ね。

それからイマージョンの話が出
ていましたが、日本の幼稚園で全
部英語で授業する。家では日本語

を使っていくわけだから、英語も日本
語もどちらも100パーセント言語能
力が身につく。これは、とんでもない
間違いです。今まで散々失敗してい
る。バイリンガルの人で、すごく文化的な
レベルの人を思い浮かべてください。
ほとんど思いつかないでしょう。私な
んかが日本語の使い手としてすごいな
あとと思うのは、わが同僚のロバート・
キャンベル、あの人の日本語がうまい
のは、英語をしっかりとした母語とし
て学んで、日本の文学を学んだからで
すね。ですから、古代、中世の文学が
読めるわけですね。我々が読めないよ
うな日本語も読んできているから、現
代の日本語だってきれいに使えるので
す。そういうことも知らないで、両方
ともシャワーのように浴びせれば、両
方ともバイリンガルで使えるようにな
る。とんでもない誤解です。
帰国子女の子、私の周りにもたくさ
んいます。大学院での指導学生の半分
ぐらいは帰国子女です。本人はバイリ
ンガルと主張するんですが、子どもの
英語なんです。自分が学んだときの



年齢の英語なんです。論文指導なん
か、かなりこちらが注意して文法を説
明しないとわからない。ただ、通じれ
ばいいという英語で書く子もいます。
もちろん、ちゃんとした子もいますけ
れど、帰国子女とかイマージョンとい
うのは、非常にあやふやな怪しいもの
です。

コミュニケーションだけで通じる英
語というのは、かなり国語が犠牲にな
っていますから議論ができないわけ
です。英語圏の人たちは英語という母語
でものすごく精緻に政治や外交を考え
る。こちらは日本語を犠牲にして英語
力を上げようとしている。母語による
思考の精度で完全に負けてしまうわけ
です。母語を超える外国語能力ではな
くて、母語の上に初めて外国語を近づ
けていくわけです。日本語の思考能力
を精緻に養っておかなかつたら、英語
なんてできるはずがないのです。

福井先生が、英語活動のメリットと
してコミュニケーションの素地が養わ
れるとおっしゃんですが、これは少
し疑問で、日本語でその活動ができな

いのかという気がしました。もう
一つのメリットとして、中一で学び
始めるときの溝がそれほど深くなく
できることを上げられました。それ
はうまくいっているケースではそう
だと思っんですが、文字も文法も教
えないといっているわけですから、
中学校に行ったとき戸惑い、逆に混
乱して英語嫌いが増えているという報
告も聞いています。両方の立場から都
合のいい話が上がってくるもので、私
はどちらとも言いかねますが、必ずし
も中学校との英語教育の接続がうまく
いっているとは思えないですね。

それから福井先生がおっしゃったデ
メリット、これはまさに私もそう思
います。もつとゆたかな表現を身につ
けてからでもいいんじゃないか。芸術活
動を削ってまでやるものとは思いま
せん。芸術活動が貧困だったら、教育
自体が貧困になるということですね。

なお、中学校からは、桑原孝さんが
宮城外国語サークルの研究を生かした
実践が報告され、斎藤兆史さんからは、
「こういう先生がいらっしやるというこ
に私は希望を持っています。まさに理
想とする英語教師だなという気がしま
した」という発言がありました。

当日の講演会の内容、発言、応答は
すべて記録してあります。関心のある
方は研究センターにご連絡ください。

● 教育時評

教委制度の改悪に

どう対応するのか

中森 孜郎

1. 首長の権限強化

さる6月13日、全国自治体の教育委員会（教委）の9割が現行制度の維持を求め、教育法学会を始め教育関係諸団体が改正反対の声明を発表するなか、地方教育行政法（地教行法）改正案が参議院で可決成立しました。

改正の要点の一つは、首長が直接教育長を任命し、しかもその教育長が教育委員長を兼務するようになったこと。もう一つは、首長が総合教育会議を主宰し、教委と教育振興施策の大綱を協議して決定するということです。と言うことは、三者の関係は、首長―教育長・教育委員長―教育委員会となります。首長の権限がきわめて強くなります。

しかも、「大綱」の範囲は曖昧ですから、教科書採択や愛国心教育など教育内容まで、首長の意志によって決定される可能性があります。

しかも、教育基本法第17条（教育振興計画）では、地方公共団体が、政府の立てる振興計画を参酌して、その地域の実情に応じた振興計画を定めるよう努めなければならぬとされていますから、今以上に、教育の中央集権化と、教育に対する政治的統制が強められるおそれがあります。

2. 審議過程で

欠落していた論点

これまでの教育再生実行会議中央教育審議会、自・公間協議などの議論を見ていると、責任の所在の明確化や政治的中立性の維持、教育行政の効率化などの観点から、首長・教育長・教育委員会からの三者の関係をどうするかが主要な問題とされてきたように思われます。

そこでは、なぜ教委制度が形骸化してきたのか、そもそも教育は誰のためのものなのかという議論が深められたとは思えません。教委の形骸化は、1956年、教育委員の公選制が任命制に変えられたために、住民の声を直接教育行

政に反映させる道が断たれ、中央集権化されたことが主要な原因です。

教育が子どものためのものであることは、憲法第26条で、教育が基本的人権の一つであると定められたことから明白で、子どもの権利条約でもそのことが明示されています。ですから、その子ども、子どもの教育に直接責任を負っている保護者・教職員や地域住民の声を教育行政に反映させることこそが、教育行政の主体性の確立と活性化をはかる上で欠かせないことです。そのような観点を欠いた地教行法改正は、主権者である国民の声から乖離したものにならざるを得ません。

3. 今から私たちは

どう対応していくのか

教委制度が変えられてしまつた今、私たちが何をなすべきなのか、そして何が可能なのか。それをみんなで考え、行動に移すことは、子どもに対する私たちおとなの責任だと私は考えます。ともかく執行機関としての教育委員会はかろうじて存続することになりました。

そこで、私自身の体験から、私なりの提案をさせていたいただきま

第1は、どの地域でも、教育委員会会議や総合教育会議を傍聴し、感想文や意見書を提出するということです。

第2は、その時々々の教育問題についての意見書や要望書を提出し、できれば教育長・首長との面談の機会をつくることです。

第3は、これはすでに「仙台の子どもと教育をともに考える市民の会」が一昨年来から市教委に申し入れていることですが、首長・教育長・教育委員と保護者・住民・教職員などが、その時々々の教育問題をテーマに、自由に意見を交換する対話集会を公開で、定期的に開くということです。それは行政と住民が子育ての輪をつくることを意味します。

以上のことを実行に移すには、地域住民の会をつくることが必要で、それには退職教師の参加が欠かせません。

ちなみに1997年、町村文相が「今後の地方教育行政の在り方について」を諮問、翌年9月中央教育審議会が有馬文相に答申を提出していますが、その中では「地域住民の意向の積極的な把握・反映と教育行政への参画・協力」を強調し、その具体的改善方策まで明示しています。

（センター運営委員）

表紙写真について

表紙の写真について、どうしても一言説明しておきたい。写真は、仙台駅前朝市ビル5階にある「朝市保育所」の子どもたちである。4月19日河北は「朝市保育園窮地」「仙台市、認可保育所移行に難色」、4月23日読売は「朝市保育所存続の危機」「補助金停止へ認可難しく」「近くにパチンコ店理由」、5月29日朝日は「仙台駅近く45メートル先にパチンコ店認可保育『格上げ』に壁」とそれぞれの見出しで、朝市保育所について報じている。3紙の見出しをトータルにすると、何が問題になっているか、おおよそわかりかと思う。

私たち研究センターは、その問題が起こる前の13年10月、朝市保育所を訪ねた。市場のビル内にある保育所をぜひ見学したいと思ったのだ。表紙写真は、その時のものである。

私の見た朝市保育所についてその日の日記をそのまま転記することで紹介してみよう。

2013年10月18日

昨日、朝市保育所を3人で訪問した。ビルの5階にあり、子どもたちは満杯の55人いるという。



台風一過、年長・年中組19人は歩いて30分ほどの公園に散歩ということで子どもたちはリュックを背負って私たちを待っていてくれた。

エレベーターは使わない。一人ずつ手をつなぎ、先頭の保育士Aさんにつづく。行き先の公園は晴れていればいつもの遊び場のよう。混み合う市場の中を迷うことなく子どもたちはつづく。店の人から声がかかる。子どもたちも返す。後尾の保育士Mさんの腰には緑色の紐が1本ぶら下がっている。時々遅れ加減になる子が紐をつかむ。これもごく自然の動作になっている。特定の子の独占にはならない。

公園に着き、リュックを同じ場所に置きやいなや、それぞれが自分の目指す場所に走る。遊具に飛びつく子、竹藪を縦横にくぐって遊ぶ子、ひとりで特定の遊具を独占する子もいないし、一か所だけで落ち着く子もいない。

ひとしきり遊びと、Aさんの合図で帰ることになる。Mさんにシャツを着替えさせてもらう子もいる。帰り仕度も速い。まだ遊び足りない子、疲れを体全体に見せる子と、落差は大きい。それも保育士さんたちは承知のうえで歩いていることがわかる。

また市場の中を通る。Mさんが「だいたいまー」と言つ。子どもたちの声もつづく。お店の人もお帰りー」と返す。お客さんはニコニコして眺めている。子どもたちもいい顔だ。心地よい空気が市場全体に流れる。

保育所の部屋にもどつた子どもたちは、すぐ昼食の用意。あつという間に、エプロンに着替えて配膳台の前に立つ子、4人がけのテーブルと椅子を用意する子。一方では昼寝用の布団を引っ張り



出して並べている。それを見ながら(すごいなあ)と思う。まだ5つや6つの子なの……。

私はこれまで、入所待ちの子の多くいることを耳にすると、働きたくとも働けない親のこじか頭に浮かばなかったが、保育所での生活が子どもをこんなにも人間として豊かにさせている事実を目にし、自分の見方の狭かったことが恥ずかしくなる。待機している子どもにとっては、人間としての成長の場を奪われている重大事なんだと思うのだ。センターに戻ってもしばらく子どもたちの姿が消えなかった。

これほど地域と密着した保育・教育施設を私は見たことがない。新聞記事のなかに、「市の担当者は『市の中心部でも保育施設は増やしたいが、子どもの環境を保障することも必要。特例を認めることはできない』と話す」とあった。子ども思いのたいへん立派な担当者なのだろう。でも、百聞は一見にしかず、私たちと同じように半日程度保育所見学をすることでこの問題は一気に氷解するのではないか。さいわい「市長は柔軟な姿勢」とも書いてあるので、間違わず解決するのだろうか……。

(6月14日 かすが 記)

日本臨床教育学会の研究大会へのお誘い

日本臨床教育学会長 田中孝彦

この秋、9月27日(土)・28日(日)に、日本臨床教育学会の第4回研究大会が、みやぎ教育文化センターの協賛を得て、仙台のフォレスト仙台ビルで開かれます。

日本臨床教育学会とは 日本臨床教育学会は、東日本大震災が起きた直後の2011年3月19日に、臨床教育学の開拓を目指して発足したまだ若い学会です。

臨床教育学という学問が確立しているわけではありませんが、この学会では、臨床教育学を次の三つの側面を含んだ総合的な人間の生存・発達の援助の学問と考え、その開拓のための試みを積み重ねているところです。

- ① 子ども・若者や成人・老人の生活についての理解を深め、人々の生存と発達を支えるための、総合的な人間理解・子ども理解と発達援助の学問。
- ② 福祉・医療・心理臨床・文化・教育、労働・行政・法律などの諸分野で働いている「援助専門職」の専門性を問い直し、それらの人々の地域での共同を促進し、「援助専門職」の養成・教育のあり方を考える学問。
- ③ とくに、教師の専門性の問い直しと、その養成・教育・研修の改革のための学問。

臨床と臨床教育学という言葉の意味 なお、この学会では、「臨床」という言葉を、「傷」や「病い」を抱えた人々のことを意識して使っているのはもちろんです。が、それだけでなく、今日の社会を生きる一人一人の人々・子どもたちの具体的で個別的な生活史に即して、援助や教育のあり方を長いタイムスパンのなかで検討しようとする、実践的・研究的な方法意識を表す言葉として使い、深めていこうとしています。

さらに、子どもたちや人々の生存・発達を支える過程は、支えようとする援助職や教師が、自らの生活・実践の質と専門性の質を不断に問いなおしていく過程であり、生涯にわたる自己教育の過程でもあります。この学会が、諸領域にまたがる総合的な人間の生存・発達についての援助の学問を臨床教育学と呼んでいるのは、そのためです。

大会の特色—実践者と研究者の徹底した共同思考の場 大会の内容・日程のあらましについては、別掲のプログラムの概要をごらんいただきたいと思います。大会は、全体シンポジウム、課題研究・特別課題研究、自由研究の三部門から構成されます。

この学会の大会の大きな特徴は、これら三つのどの部門においても、援助・教育の仕事に携わる実践者とそれに関心を持つ研究者との、対等の共同思考・共同研究の場となることをめざしているところにあります。とくに、自由研究部門に「実践研究」という枠を設け、実践者の報告を丁寧に聴き検討できるように、報告・討論の時間を可能な限り長くとるようにしているところなどは、他学会にはあまりみられない大きな特色であろうと思われます。

宮城の、東北の、全国のみなさんご参加を、心よりお待ちしております。

日本臨床教育学会 第4回研究大会 案内

日程 2014年9月27日(土)～28日(日)

会場 フォレスト仙台ビル

◆1日目(9月27日)

9:30	9:45	11:45	12:30	15:00	15:15	18:15
受付	自由研究発表(A) 一般研究	昼食	課題研究	休憩	シンポジウムⅠ ※開会行事・全体討論も含む	

◆2日目(9月28日)

9:00	9:15	10:00	12:30	13:30	15:30	※ 18:30～20:30 懇親会(フェレスト仙台)
受付	定期総会	シンポジウムⅡ	昼食	自由研究発表 (B) 実践事例研究		

1, シンポジウムⅠ「患者を丸ごとみる地域医療」の取り組みから, 教師・援助職のあり方を考える

- 進め方
1. 岩手県立高田病院の取り組み(ビデオ鑑賞)
 2. 石木幹人氏(岩手県立高田病院医師)講演
 3. パネルディスカッション [パネラー] 石木愛子氏(医師), 教師など
 4. 全体討論

2, シンポジウムⅡ「臨床教育学の実践スタイル」— 研究的実践者と実践的研究者の共同—

3, 課題研究(1日目 12:30～15:00)

- Ⅰ 現代の子どもと子ども理解(障害を持ちながら生きる子どもたちの理解など)
 - Ⅱ 子どもと若者の育ちを支える地域からの共同(被災地での学童保育や子ども支援の実態, その課題など)
 - Ⅲ 発達援助職の専門性の問い直しと養成・教育の課題(養護教諭論に焦点を当てて考える)
 - Ⅳ 教師の専門性の再検討, 教師教育改革の課題(若い教師たちの学びの場を創る試み, PISAの問題など)
 - Ⅴ 臨床教育学の方法と概念(宮城・東北の報告者を含んで)
- 【特別課題研究】東日本大震災と臨床教育学(震災後の教育実践の試みと教師像の模索など)

4, 自由研究発表

A. 一般研究発表(1日目 9:45～11:45)

- | | |
|-----------------|-------------------|
| Ⅰ 幼児教育・保育の実践と課題 | Ⅱ 教育実践の思想と臨床教育学 |
| Ⅲ 教師教育における養成の課題 | Ⅳ 人間発達援助実践の課題 |
| Ⅴ 教師の専門性と現場の課題 | Ⅵ 障害をもつ人々の生活理解と支援 |
| Ⅶ 心の傷つきとケアの課題 | |

B. 実践事例研究発表(2日目 13:30～15:30)

- | | |
|------------------------|----------------|
| Ⅰ 子どもの育ちと学びを支える教師 | Ⅱ 子ども理解と援助者の葛藤 |
| Ⅲ 困難を抱える子どもたちの学びの空間づくり | Ⅳ 地域を基盤とする福祉実践 |

※ 参加など大会についての問い合わせは, 研究センターまで。 詳細については, 後日案内いたします。

センターの動き

〈4月〉

- 1日 社会科実践書編集会
議 4月分予定表提出
- 4日 事務局会議のための準備
- 11日 今年度第1回事務局会議 新メンバー3人本田さん、中野さん、白鳥さん。つうしん74号感想交換、今年度の企画についての話し合い。
- 14日 午後、国語実践書を使って学習会を3回もつ
- 18日 午後、社会の実践書をつくり。
- 21日 会館にセンター関係の今年度の名簿を提出。
- 23日 事務局会のレジメ作成。

◆本の紹介◆

三上満著 『いまほんとうの教育を求めて』 (新日本出版社)

今年1月の高校生公開授業においていただいた三上満さんの新刊です。『ほんとうの教育』というタイトルをみて、すぐ宮澤賢治の『ほんとうの幸い』を連想し、宮澤賢治を敬愛する三上さんらしいタイトルだと感じた。と同時に、二人は、まさにほんとうを追いかめるという点でその生き方も共通している。安倍第2次政権のもとさまざまな改革が推し進められようとしているだけに、本書を通じて改めてほんとうの教育とは何かを考えたい。なお本書では、震災後の宮城の教師の取り組みも語られている。〈定価1600円+税〉



出浦由美子著 『父を訪ね 母を辿る旅』 (文芸社)

どうして父は遠い南洋の地で死ななければならなかったのか。そう思い続けてきた著者の出浦さんがようやく訪れた父の戦死地とは……。そして、太平洋戦争の渦中で翻弄された母の人生と引き上げの記憶を辿ります。今では戦争体験者も高齢となり、当時のことをじかに聞くこともなかなか難しくなってきました。戦争のあの時代を、どう記憶していくのか。次世代へ語り継ぐ貴重な引き揚げ者の証言と旅の記録です。〈定価1000円+税〉



- 24日 午後、「命の授業」についてのプランづくりに参加。制野さんの課題がふくらんで終わる。
- 25日 事務局会議。つうしん購読者名簿を見て現職が少ないことに驚く。どうすれば現職の人たちに読んでもらえるか。いろいろな意見は出たが……。
- 28日 1時半からヤスパース読書会。
- 29日 宮城の会主催の「安倍政権の教育再生」。講師は堀尾輝久さん。
- 30日 つうしん75号について話し合う。
- 26日 午後、ヤスパース読書会。ヤスパース読み終える。来月からは「人間教育の哲学史」をテキストにする。社会実践書編集会議、国語講座の案内チラシ完成。
- 30日 午後、高校生の授業の件で佐藤春治さんに入ってもらい話し合う。TBSの金平茂紀さんに依頼することにまとも。須藤さんと子どもフォーラム、放課後のくらし方をテーマにする方向ですすめることに。
- 23日 10時から国語講座の打ち合わせ。事務局会議、子どもフォーラムのことと時間をとる。
- 22日 午後、社会の実践書づくり。院生、今日も一日いる。
- 21日 午後、広島大学の院生が来室。師範が東北大学に統合されたことを調べているという。午後いっぱい付き合う。
- 20日 午後、社会の実践書づくり。院生、今日も一日いる。
- 16日 金平さんに直接電話で話をする。メールも見ておいてくれ、「高校生の公開授業」の授業、正式に受けていた。国語の講座についての打ち合わせ。午後、哲学講座。今日から「人間教育の哲学史」をテキスト。新しい参加者もあり、読書会の雰囲気も新しくなる。
- 17日 社会の実践書原稿の全体に目を通す。
- 18日 通信の全体について話し合う。

〈5月〉

- 5日 京都大学院生さん3時半来室。子どもの美術・生活科教科書・太田弘について3時間近く話し合う。
- 8日 1時から臨床教育学会研究大会の第2回打ち合わせ。上田さんと渡辺さん来室。
- 9日 10時から国語実践書を使つての学習会についての打ち合わせ。3時から運営委員会、全体を考えた建設的な発言多くうれしく思う。どう具体化していくかがこれからに課せられた課題。
- 14日 会館に13年度の報告を届ける。別冊原稿の整理をする。
- 15日 5時から仙教組との定例学習会についての話し合い。6月から第4水曜にもつことにする。
- 21日 午後、広島大学の院生が来室。師範が東北大学に統合されたことを調べているという。午後いっぱい付き合う。
- 22日 午後、社会の実践書づくり。院生、今日も一日いる。
- 23日 10時から国語講座の打ち合わせ。事務局会議、子どもフォーラムのことと時間をとる。
- 26日 午後、ヤスパース読書会。ヤスパース読み終える。来月からは「人間教育の哲学史」をテキストにする。社会実践書編集会議、国語講座の案内チラシ完成。
- 30日 午後、高校生の授業の件で佐藤春治さんに入ってもらい話し合う。TBSの金平茂紀さんに依頼することにまとも。須藤さんと子どもフォーラム、放課後のくらし方をテーマにする方向ですすめることに。
- 2日 通信・フォーラム。20周年記念のことを話し合う。夕方、制野さん来室。「いのち」の授業について話し合う。
- 5日 クレスコ広瀬さんに金平さんへお願いの趣旨を書いたメールを入れる。
- 11日 昨日のつづき。江島・小野寺さんの2本を入れて2人で話し合う。
- 12日 2時から会館理事会。
- 13日 事務局会議。子どもフォーラムと20周年記念について。わりとスムーズにすすむ。終わつて、学会についての話し合いをする。
- 16日 金平さんに直接電話で話をする。メールも見ておいてくれ、「高校生の公開授業」の授業、正式に受けていた。国語の講座についての打ち合わせ。午後、哲学講座。今日から「人間教育の哲学史」をテキスト。新しい参加者もあり、読書会の雰囲気も新しくなる。
- 17日 社会の実践書原稿の全体に目を通す。
- 18日 通信の全体について話し合う。

(春日)

